

奈良県桜井市

纏向遺跡発掘調査概要報告書

—トリイノ前地区における発掘調査—



2013. 5. 31

桜井市纏向学研究センター編
桜井市教育委員会

例 言

1. 本書は桜井市教育委員会が実施した桜井市大字辻小字トリエノ前地区の範囲確認調査概要報告書である。調査は長期にわたり、整理すべき出土遺物や調査記録も膨大な量にのぼるため、正式報告書の刊行までかなりの時間を要することが予想されることから、中間報告として本概要報告書を刊行するものである。調査の成果については、現地説明会資料をはじめとして幾つかの文献において既に概要の報告を行ったが、本書の刊行をもって現時点の正式な報告とする。
なお、本報告における遺構の年代観やその内容についても今後の調査と整理作業の進展により変更の可能性あることを予め付言しておく。
2. これまでの調査期間や体制については紙幅の関係上、正式報告書に譲ることとし、本書の刊行体制のみを以下に記録しておく。
(編集機関) 桜井市纏向学研究センター 所長 寺澤薫、主任研究員 橋本輝彦、
研究員 松宮昌樹・福辻淳・丹羽恵二・森暢郎、
嘱託研究員 木場佳子・杉山真由美
(発行機関) 桜井市教育委員会 教育長 雀部克英、事務局長 田井中正行、
事務局次長(文化財課長事務取扱) 竹田勝彦、
文化財係長 井前貴雄、主任 松宮昌樹・福辻淳・丹羽恵二、
臨時職員 杉山真由美・西岡恵美
調査研究係長 橋本輝彦、技師補 森暢郎、臨時職員 木場佳子
3. 本書で使用した方位はすべて世界測地系による数値を示す。なお、レベル高は海拔高である。
4. 執筆者：本書の執筆は橋本がこれを担当した。なお、図面の浄書はすべて木場によるものである。
5. 編集者：本書の編集は所長の指導を受け、森・木場と協議のもと橋本がこれを担当した。

目 次

例言

目次

序…………… 1

I 調査地の位置と環境…………… 2

1. 地理的環境…………… 2

2. 周辺の遺跡…………… 2

II トリエノ前地区の調査

1. はじめに…………… 8

2. 調査地の位置と環境…………… 8

3. 検出された遺構…………… 9

4. まとめ…………… 32

III おわりに

1. 纏向遺跡の諸属性…………… 34

2. 纏向遺跡の位置づけ…………… 36

報告書抄録

序

私達の桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域の約3割を占める平野部の中央には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、纏向川等の清流を集めた大和川が横断し、この大和川を挟んで南は桜井茶臼山古墳をはじめとしてメスリ山古墳、安倍寺跡、上之宮遺跡、坪井・大福遺跡、北では芝遺跡、箸墓古墳、纏向遺跡など全国的にも貴重な文化遺産が数多く知られています。

桜井市ではこれらの遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力をいれておりますが、ここに報告させて頂くのは平成20年度より桜井市教育委員会が国・県よりの補助を受けて実施してきました纏向遺跡トリイノ前地区における調査の概要報告であります。

現地調査にあたりまして指導・助言を頂いた多くの関係機関の方々、地主及び地元協力者の方々、厳寒・酷暑のなか作業に従事して頂いた作業員・学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力頂いた整理員の方々に深く御礼申し上げます。

この多くの皆様の御協力のもとに成った本書が文化財の普及・啓発の一助となり、また研究者の方々の資する所となれば当委員会としても望外の喜びであります。

平成25年5月31日

桜井市教育委員会

教育長 雀 部 克 英



現地説明会の様子（第166次調査）

I 調査地の位置と環境

1. 地理的環境

桜井市は奈良盆地の東南部とその背後に続く大和高原・宇陀山地・吉野山地の一部より構成されている。人口約60,000人、面積98.92km²の市域の約70%は山地であり、平地は北西部の30%に過ぎないが、市域のほぼ中央では春日山断層と初瀬構造谷が交差し、巻向山地塊崖・御破裂山地塊崖が盆地に面する西北斜面にはいくつもの溪谷が形成されている。

また、平地部にはこれらに源を発する初瀬川や寺川・米川・纏向川・栗原川など多くの河川が流れ、これらによって形成された扇状地の自然堤防上を主として多くの遺跡が展開している。

纏向遺跡の主要な遺構は纏向川と烏田川に挟まれた扇状地上に展開するもので、現在考えられている遺跡の規模は最大となる布留式期で東西約2km、南北約1.5kmにも達するが、遺跡はさらに北の天理市柳本地域まで広がる可能性がある。

さて、遺跡の内部には南北を旧河道により限られた6つの微高地が点在するが、太田北微高地のトリイノ前地区は東から西へと緩やかな傾斜をもった微高地のほぼ中央に位置し、幅の狭い標高約74~75mの下位段丘上には庄内式期を中心とした遺構が展開している。

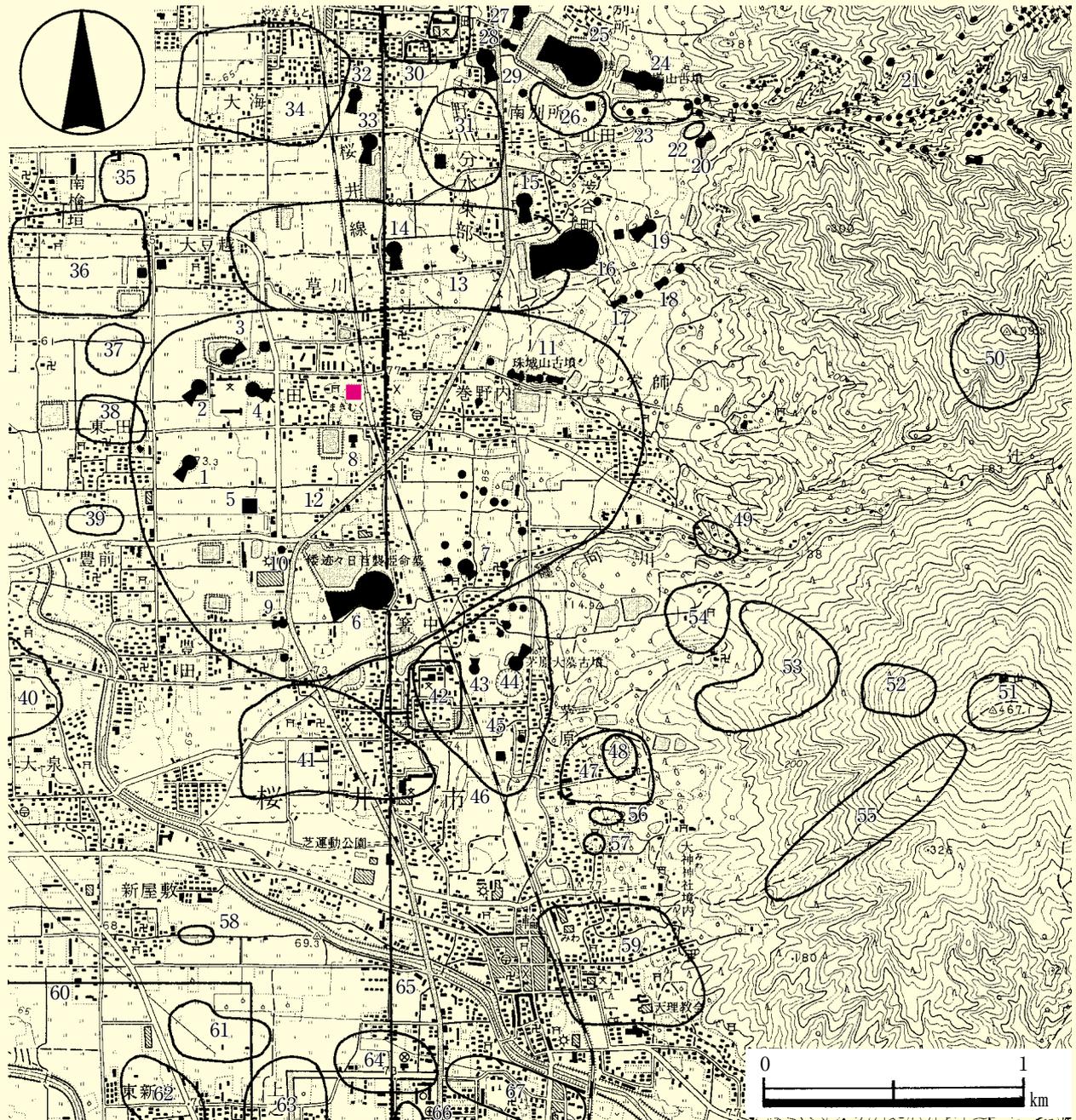
2. 周辺の遺跡

纏向遺跡(12)が出現する古墳時代前期初頭になると、弥生時代の大規模集落であった坪井・大福遺跡や芝遺跡(41)など集落遺跡の殆どがその規模を縮小させていく(図1)。市内における庄内式期の遺跡には大福遺跡や東新堂遺跡(62)・城島遺跡・上之宮遺跡・脇本遺跡などで当該期の遺構や遺物が確認されているが、集落と呼べるほどの内容が確認されているものは皆無といってよい。

現在確認されている遺跡の状況からみて、古墳時代前期の集落の存在が顕著になるのは布留1式期以降のことで、纏向遺跡の縮小に呼応するかのように大福遺跡や上之庄遺跡(63)・安倍寺遺跡・大西遺跡(40)・河西遺跡・忍阪遺跡などにおいて遺構・遺物が散見されるようになる。遺跡の規模は依然としてごく小規模なものだが、上之庄遺跡(63)では布留2式期の滑石や緑色凝灰岩を使った玉造り遺構が検出されており、古墳時代における滑石製品の製作遺跡としては最古級のものと言える。

さて、前期の古墳としては纏向遺跡内に点在する纏向石塚古墳(4)や矢塚古墳(2)・勝山古墳(3)・ホケノ山古墳(7)・東田大塚古墳(1)・南飛塚古墳(5)・メクリ1号墳(8)・箸墓古墳(6)など、国内最古級の前方後円墳を中心に構成される纏向古墳群がある。纏向遺跡より南の地域に目を向けてみると、初瀬川より南には纏向古墳群に後出する桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳などの前期の大型前方後円墳とともに、布留1式期の赤尾熊ヶ谷古墳群や前期後半から中期初頭にかけての池ノ内古墳群などの小規模な円墳や方墳が存在するが、この地域における前期古墳はごく限られた存在である。

一方、遺跡の北に隣接する天理市柳本地域には洪谷向山古墳(16)や行燈山古墳(25)を中心とした柳本古墳群が展開しており、天神山古墳(29)・櫛山古墳(24)・柳本大塚古墳(14)石名塚古墳(33)などがある。この古墳群も基本的には纏向古墳群に後出するものが殆どだが、馬口山古墳やノムギ古墳・マバカ古墳など、出現期に遡る可能性が考えられている古墳も複数含まれている。



■纏向遺跡トリノ前地区

- | | | | |
|-------------------|---------------------|-------------------|--------------------|
| 1. 東田大塚古墳 | 18. 立石古墳 | 35. 遺物散布地 (古墳) | 52. 中津磐座 |
| 2. 矢塚古墳 | 19. シウロウ古墳 | 36. 檜垣遺跡 | 53. 辺津磐座 |
| 3. 勝山古墳 | 20. ラカタ塚古墳 | 37. 遺物散布地 (弥生) | 54. 松原遺跡 |
| 4. 纏向石塚古墳 | 21. 龍王山古墳群 | 38. 遺物散布地 (古墳～平安) | 55. 禁足地裏磐座群 |
| 5. 南飛塚古墳 | 22. 遺物散布地 (古墳後) | 39. 豊前遺跡 | 56. 馬場遺跡 |
| 6. 箸墓古墳 | 23. 遺物散布地 (弥生後～古墳前) | 40. 大西遺跡 | 57. 大神寺跡 |
| 7. ホケノ山古墳 | 24. 櫛山古墳 | 41. 芝遺跡 | 58. 新屋敷遺跡 |
| 8. メクリ1号墳 | 25. 行燈山古墳 | 42. 芝村陣屋跡 | 59. 三輪遺跡 |
| 9. イヅカ古墳 | 26. 山田遺跡 | 43. 毘沙門塚古墳 | 60. 大藤原京跡 |
| 10. ビハクビ古墳 | 27. アンド山古墳 | 44. 茅原大墓古墳 | 61. 上之庄遺跡 |
| 11. 珠城山古墳群 | 28. 南アンド山古墳 | 45. 茅原塚古墳 | 62. 東新堂遺跡 |
| 12. 纏向遺跡 | 29. 天神山古墳 | 46. 茅原遺跡 | 63. 上之庄遺跡 |
| 13. 遺物散布地 (弥生～古墳) | 30. 柳本城跡 | 47. 箕倉山遺跡 | 64. 三輪松之本遺跡 |
| 14. 柳本大塚古墳 | 31. 遺物散布地 (古墳後～平安) | 48. 箕倉山城跡 | 65. 上ツ道 |
| 15. 上の山古墳 | 32. ノベラ古墳 | 49. 車谷遺跡 | 66. 遺物散布地 (古墳後～奈良) |
| 16. 渋谷向山古墳 | 33. 石名塚古墳 | 50. 穴師山城塞跡 | 67. 三輪松之本東遺跡 |
| 17. 立子古墳 | 34. 柳本遺跡 | 51. 奥津磐座 | |

図1 纏向遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)



写真1 纏向遺跡トリイノ前地区全景（上が北）

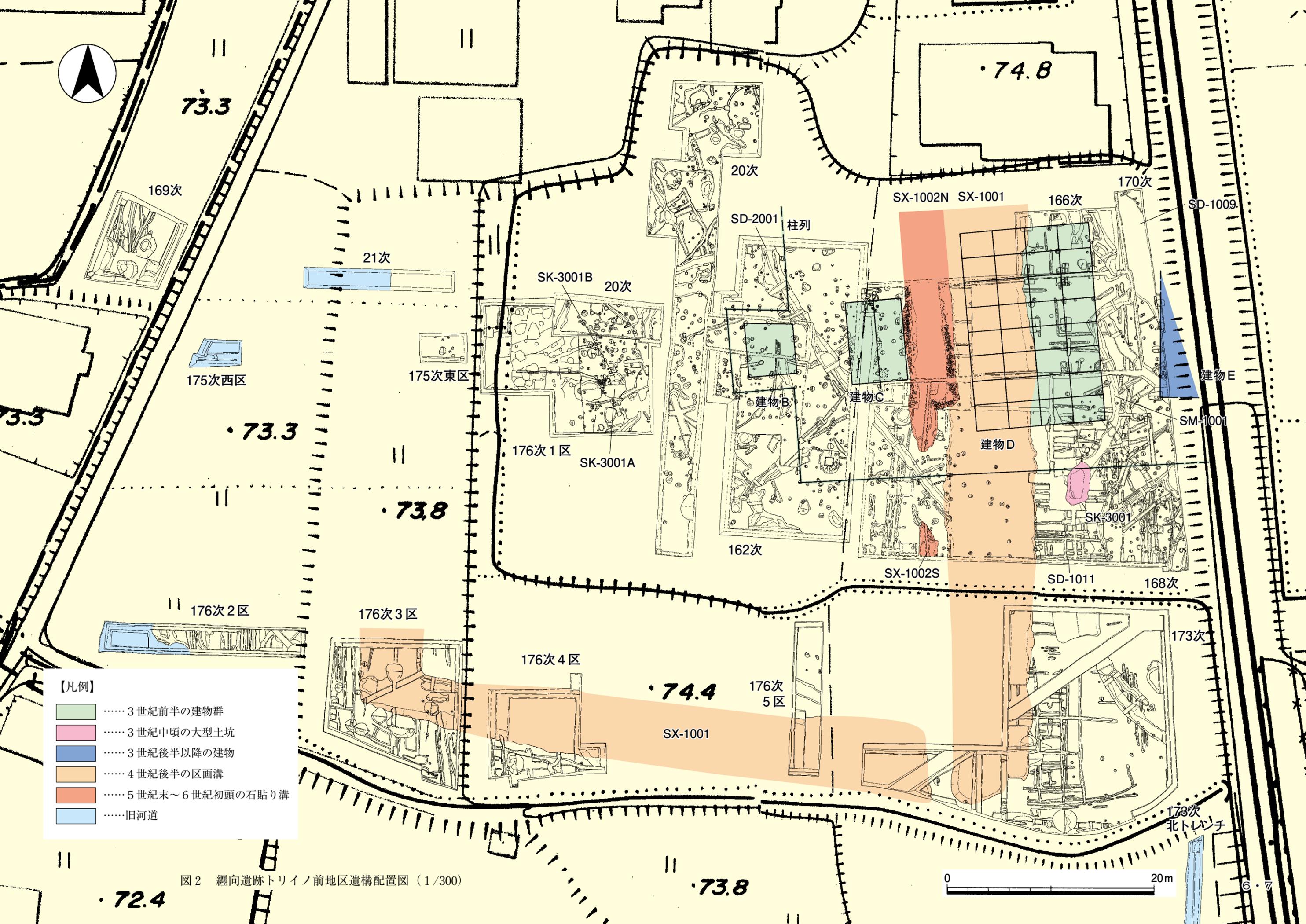


図2 縦向遺跡トリイノ前地区遺構配置図 (1/300)

- 【凡例】
- 3世紀前半の建物群
 - 3世紀中頃の大型土坑
 - 3世紀後半以降の建物
 - 4世紀後半の区画溝
 - 5世紀末～6世紀初頭の石貼り溝
 - 旧河道

0 20m

Ⅱ トリイノ前地区の調査

1. はじめに

トリイノ前地区における範囲確認調査は平成17年度から継続的に実施してきた纏向古墳群及び纏向遺跡の史跡指定を目指した範囲確認調査の一つで、平成20年度に纏向古墳群の範囲確認調査の目途がついたことを受けて、平成21年2月より集落部分の調査に着手したものである。

一連の調査で対象としたのは大字辻64番地1およびその周辺の微高地上で、昭和53年度に奈良県立橿原考古学研究所によって纏向遺跡第20次調査が行われ、かつて神殿状建物とされた一辺約4.8m×5.4mの庄内式期の建物や柱列が検出された場所と同じ微高地上である。

今回の範囲確認調査はこの第20次調査で検出された建物や柱列などの存在を手掛かりとし、微高地上に展開する遺構群の全体像を解明することを目的として実施したもので、これまでに第162次・166次・168次・170次・173次・176次調査と6次にわたって調査を実施している。

2. 調査地の位置と環境

トリイノ前地区は纏向遺跡の遺跡範囲のほぼ中央に位置し、調査地は太田北微高地と呼ばれる標高75m前後の東側から派生する下位段丘上の微高地にあっている。過去の調査成果からは、この微高地の南北には旧河道が東西方向に流れていた事が判明しており、現状では東西に長く、南北に存在する谷部分より約2m高い地形を形成している(図3)。

なお、旧河道はいずれも古代まで流れがあったことが判明しているが、図に示した黒塗りの旧トレンチ部分は古墳時代前期の河道幅を示し、他は地形から推定される古代までの最大幅を示している。

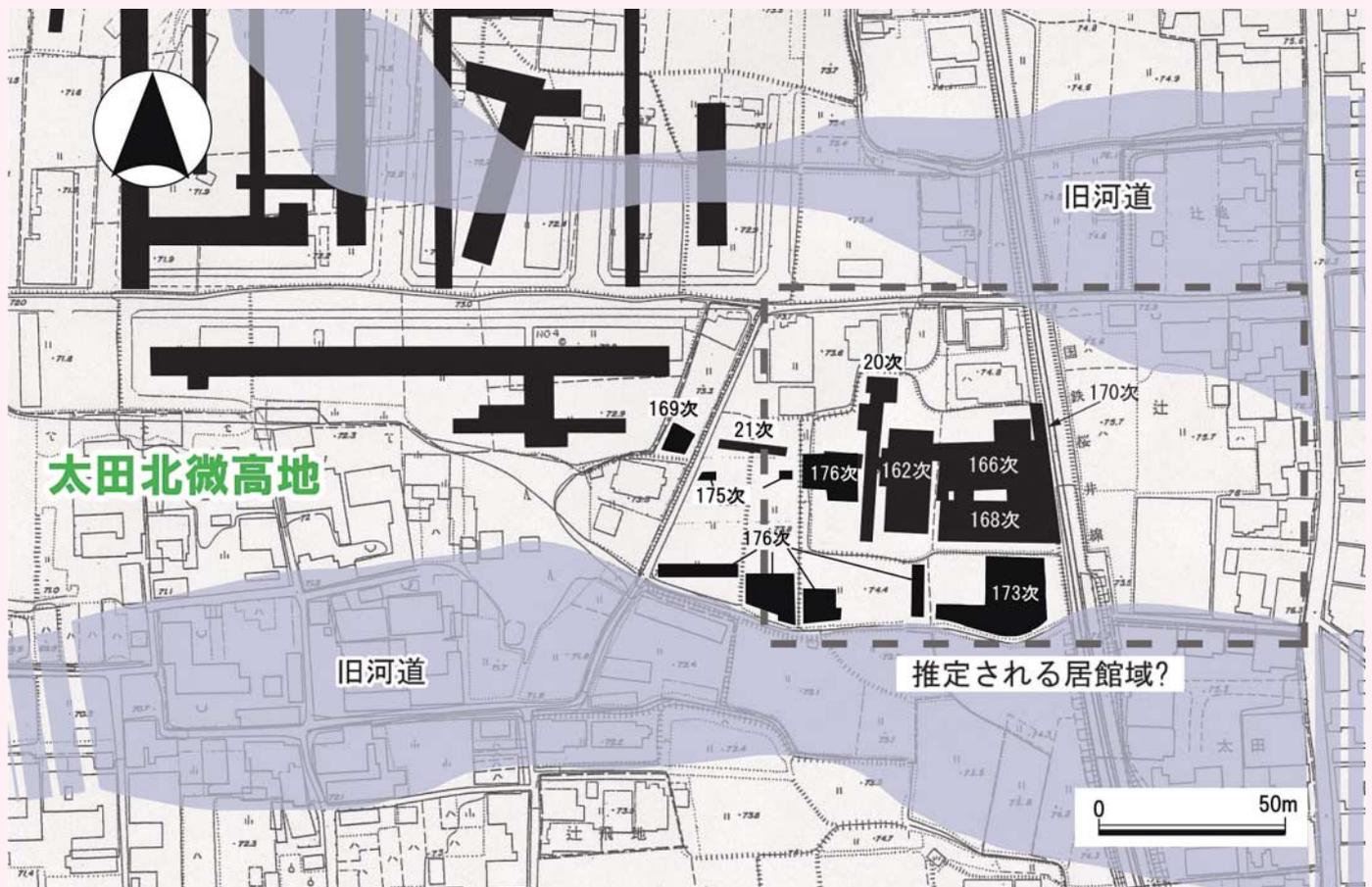


図3 トリイノ前地区トレンチ配置図(1/2,000)

3. 検出された遺構

調査は第20次調査の成果を受けて、上層では3世紀後半の遺構面となる包含層Ⅲ上面での調査を行うとともに、下層の調査では包含層Ⅲの下部において3世紀前半の遺構面となる地山面および整地層で形成された遺構面の2面において調査を行っているが、本書では多くの柱列や建物群が確認された下層検出の遺構群を中心として報告することとする（図2・写真1）。

a. 遺構面の状況

3世紀前半の遺構が存在する下層の遺構面は大きく分けて黄褐色粘質土（地山）・灰褐色砂礫（縄文時代後・晩期に形成されたとみられる堆積層）・黄褐色粘質土ブロックを多く含んだ灰褐色土（整地土）の3つの土壌から構成されている。後述する建物C・D・Eの南半部分から南側一帯、そして第173次調査区一帯にかけては微高地内でも本来は最も高い部分にあたとみられ、遺構面には黄褐色粘質土の地山が一部露呈していたが、第162次調査区の南半部分では南側に位置する旧河道部へと地山が徐々に落ち込んだ地形に古い時期の河川性の堆積土とみられる灰褐色砂礫層が被っており、この砂礫層が地山に相当する遺構面のベースとなっている。

また、微高地の北側部分に相当する第20・162・166次調査区の北側部分も南半地区と同様に北側の旧河道部へと向かって地山が緩く落ち込んでいたが、この部分には微高地上の地山の高い部分を削り平坦化をはかったとみられる整地土が厚く盛られており、下層遺構はこの整地土の上面において検出されている（写真2）。

この整地作業は非常に広い範囲にわたって行われており、微高地上においては第176次調査地から第20・166・168・170次のいずれの調査区においても整地層が確認されていることに加え、遺構の検出レベルも標高74.3m前後と、ほぼ一定のレベルである事からは、後述する建物群の建築に際し丁寧な造成作業が行われた様子がうかがえる。

なお、部分的に実施した断ち割り調査や側溝断面の観察からは整地層の下に潜り込んだ地山面上においても建物群等に先行する遺構が多数存在することが確認されたが、今回の調査では建物群を含めた下層遺構の保存に配慮し、敢えて整地層の除去を行わず、遺構に影響のない部分での調査にとどめ、最下層遺構面での調査は行わない事とした。

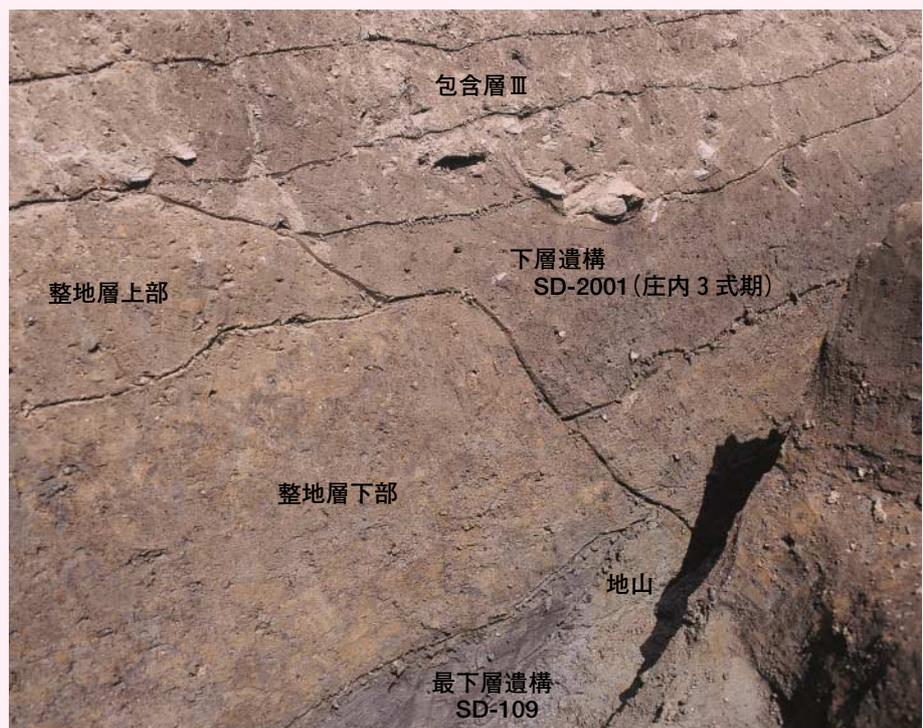


写真2 第162次調査区北壁西隅部分の土層堆積状況（整地層下部の厚みは約48cm）

b. 3世紀前半の建物遺構

建物B

一連の範囲確認調査の手掛かりとなった建物遺構で、第20次調査時にはSB-101として報告が行われている。今回の調査では、第162次調査においてこの建物の周辺部分を拡張し、再調査を行ったが、その後検出された建物遺構との整合性をつけるため、建物Bと称することとした。

建物Bは東西2間（約4.8m）×南北3間（約5.2m）、床面積約24.96㎡の規模を持った建物遺構で、建物方位はN-4~5°-Wで、真北に対してやや西へと振れていた。（図4~7・写真3~5）

また、建物の東・西・南の三辺はお互いが正しく直交或いは並行するのに対し、北辺は北東隅の柱穴が本来あるべき位置よりもやや南に位置して掘削されていることから、他の三辺とは方

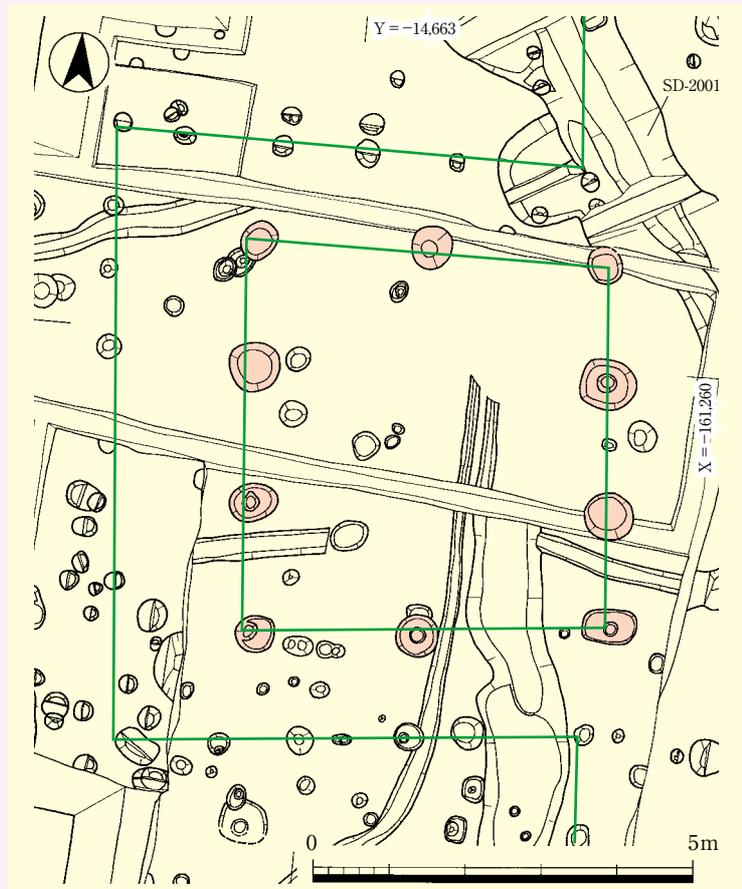


図4 建物B遺構平面図（1/100）



写真3 建物B全景1（第162次 南西より）



写真4 第162次調査地
航空写真
(左が北)



写真5 建物B全景2
(第162次 西より)

黄色い模擬柱が建物の柱跡で、白い模擬柱が柱列の柱跡を示す。手前の建物が建物B、奥には建物Cの西辺が検出されている。

位を同じくしていない。この建物の平面プランの歪みについての理由は判然としないが、一案として建物の建築材の歪み等を解消し、建物床面部分を正しく方形にするための所作かと考えている。

柱穴は円形のものやや隅丸方形に近い形を呈するものがあり一定しないが、概ね径50~60cmの大きさを持つ。柱穴の深さは多くが検出面より約30~40cm前後と比較的浅いが、第20次調査では整地土を除去後に遺構が検出されていることに起因するものである。第20次調査区の北壁に残る北東隅柱穴の断面の様子からはこれらの柱穴は整地土上面から掘削されたものであることが確認でき、本来の検出面とみられる整地土上面からの深さは約50cm前後あったことが推定されるとともに、建物Bが整地行為に伴う建物であることがうかがえる。

なお、この建物の多くの柱穴内には柱のあたり痕跡が確認でき、使用された柱材の直径は20cm程度のものであったと推定されるとともに、第20次調査ではこの建物は廃絶時に柱材が抜き取られたことが判明している。このうち、建物西辺の南から2つめの柱穴の抜き取り穴内からは、ほぼ完形の小型器台が1点出土しており、建物の廃絶時期を知る手掛かりとなる。

また、先述した建物北東隅柱穴の上部は第162次調査区から第168次調査区へとつながる溝遺構(SD-2001)によって一部削平を受けていることが解っている。調査の結果、この溝遺構(SD-2001)は庄内3式期に埋没したものであることが判明しており、先の小形器台の年代観とともに、建物Bの廃絶が庄内3式期を含めてそれ以前であることが判明している。

さて、図5～7は神戸大学の黒田龍二氏に作成して頂いた建物Bの復元図である。復元では約2.5mと非常に高い位置に床面が復元されているが、これは後述する建物Bの周囲を廻る柵とみられる柱列との

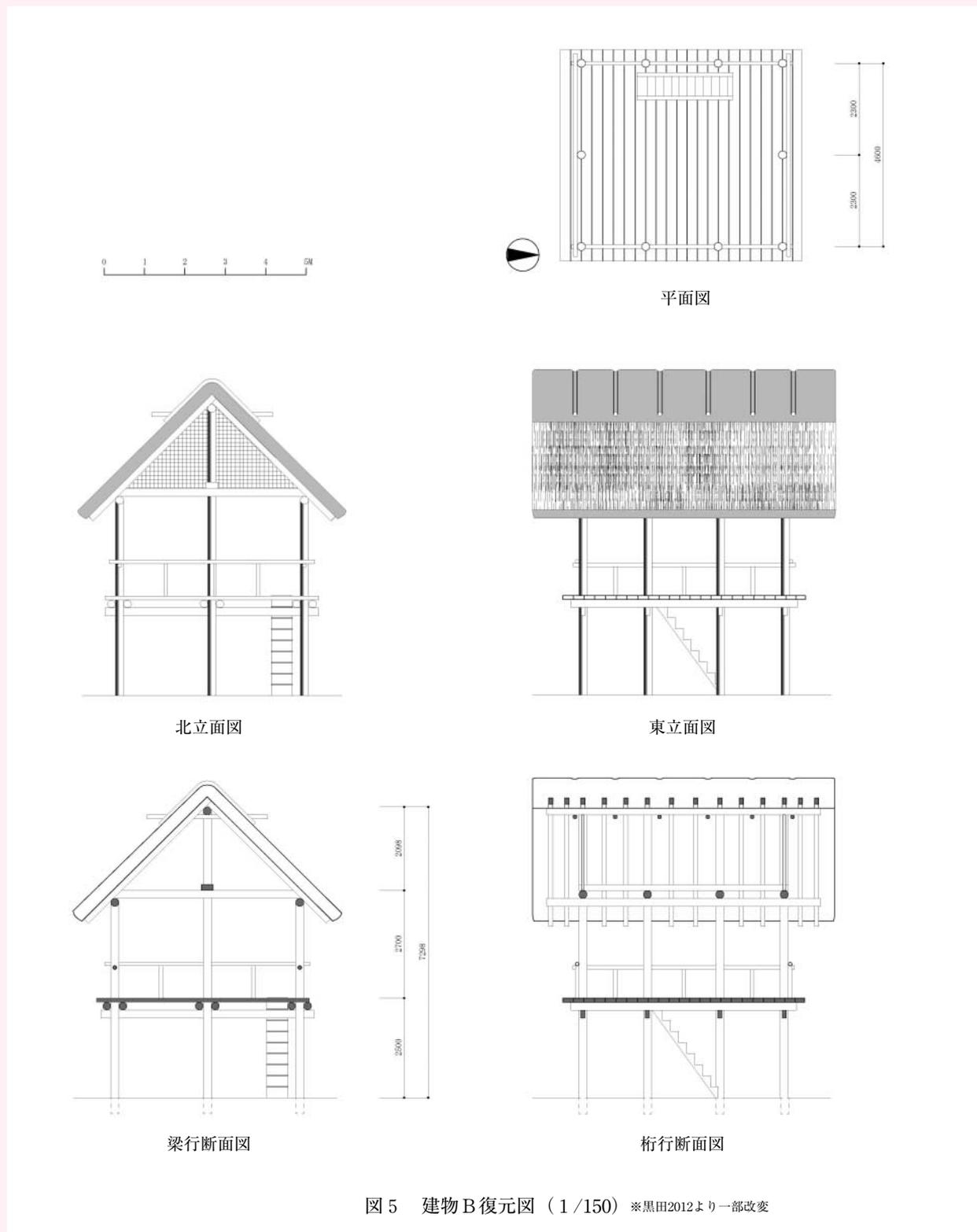




図6 建物B復元CG1（南東より）

©NHK/タニスタ 監修 黒田龍二



図7 建物B復元CG2（北東より）

©NHK/タニスタ 監修 黒田龍二

関係を勘案して復元がなされたものである。建物Bと柱列との間は狭い所で1.5m、広い所でも1.7mと非常に近接しており、建物Bが床の低い建物であるとすれば屋根と柱列が干渉する可能性が考えられることから、高い位置に床面が想定されている。なお、この建物の構造および建物を取りまく柱列との位置関係などから推定すると、建物への出入りは東面から行われたものと考えられる。

建物C

第162・166次調査区にまたがって検出された建物遺構で、建物B東面からの距離は約5.2mである。建物規模は東辺南端柱穴が先述した庄内3式期に埋没する溝遺構（SD-2001）によって削平を受けていたこと、西辺柱穴が5世紀末から6世紀初頭の石貼り溝（SX-1001N）の石貼り裏込めや、調査時に設定した排水溝によって削平を受けたことにより、正確な規模は不明であるが、幸いにして、削平を免れた南北の両近接棟持柱が検出されており、この棟持柱の位置からある程度の規模を推定することができる。

残存する柱穴の位置から推定される建物規模は東西1間（東西約5.2m）×南北3間（南北約8m）、床面積約41.6㎡で、建物方位は先の建物Bと同じくN-4~5°-W、真北に対してやや西へと振れを持つ

ている。(図8～11・写真6～8)

柱穴は円形のものと同円形の二者があり、概ね径70～80cmと比較的大きなものであったが、柱穴の深さは20cm前後と非常に浅く、遺構の残りはあまり良好なものではなかった。

このうち、建物東辺の北から2番目の柱穴は西辺において検出した柱穴とは柱通りにズレが生じている。東辺の柱穴は先述したように石貼り溝(SX-1001N)の裏込め作業に伴う掘削に東半の多くを大きく削り取られていたため、他の柱穴ほど明瞭に柱穴痕を検出できたとは言い難く、遺構検出の段階で位置やプランに誤認があった可能性も否定できない。

なお、検出された柱穴のうち、建物西辺柱穴の幾つかには柱のあたり痕跡とみられる窪みが確認できるものがあり、建物に使用された柱材の直径は建物Bと同じく20cm程度のものであった

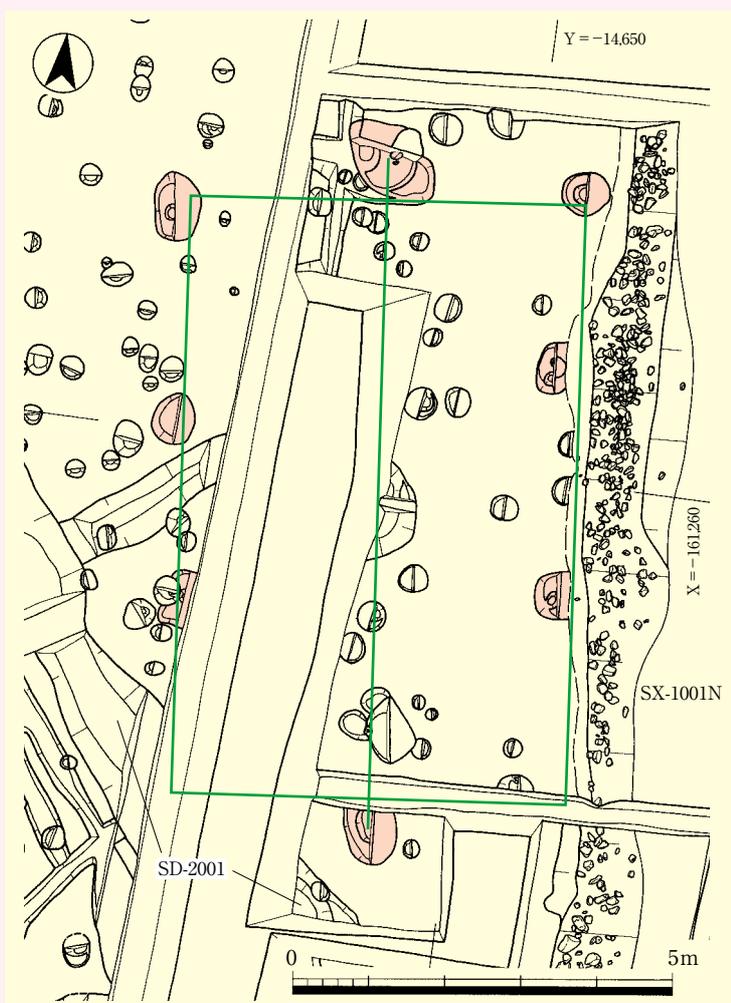


図8 建物C遺構平面図(1/100)



写真6 建物C全景1(第162・166次調査の合成写真。上が北)

と考えられる。また、南北の棟持柱柱穴は楕円形を呈し、いずれもが長径約1 m、短径約80cmと他の柱穴より若干大きなものであったが、深さは約20cmとほぼ同じ深度であった。また、この建物も建物Bと同様に建物の廃絶時には柱材が抜き取られた可能性が高いと考えている。抜き取りの痕跡が特に顕著に認められるのは北側の棟持柱の柱穴で、柱穴の南半部分からは抜き取りに伴うとみられる不定形の掘り込みを確認している。

さて、建物Cは先の建物Bと同様に柱穴のいずれもが整地土上面において検出されており、整地土上面を覆う包含層Ⅲの下面に柱穴の切り込み面が存在することから、建物Cもやはり整地行為に伴う建物と判断される。建物Cの建築時期を究明するには整地土造成の時期と整地土下に存在する最下層遺構の時期がその手掛かりとなるが、一連の調査では整地土上面の遺構の保護のため最下層遺構面の調査に制約があり、一部で整地土の断ち割りや遺構の調査を行ったのみで、建物の建築時期は明らかにすることができていない。

一方、廃絶時期については建物Bと同様に西辺南端の柱穴が溝遺構（SD-2001）によって削平を受け



写真7 建物C全景2
(第166次 北東より)

この写真では削平により存在しないはずの西辺南端柱想定位置に建物の全容をイメージするために黄色い模擬柱を立てている。



写真8 建物C全景3
(第166次 南東より)

この写真では削平により存在しないはずの西辺南端柱想定位置に建物の全容をイメージするために黄色い模擬柱を立てている。

ており、建物の廃絶は庄内3式期を含めてそれ以前であることが判明している。

この様に建物Cは整地作業が行われた後に構築されていること、廃絶の時期が庄内3式期を含めてそれ以前と考えられること、建物の柱材が抜き取られていることなど、建物Bと共通する要素が多いことや建物の軸線や方位が建物Bと揃えて建てられていることなどから、2つの建物は併存していたものと判断している。

次に、図9～11には建物Bと同じく黒田龍二氏に作成して頂いた建物Cの復元図を示しておく。建物Cの最大の特徴は纏向遺跡では初の検出例となる近接棟持柱を持った建物という点であろう。復元では現在の神社建築に通じる構造の建物がイメージされており、建物の出入口は東面に設定されているが、調査においては出入口を特定し得る遺構は確認されておらず、建物Bおよび建物Dなどとの建物配置の関係から想定されたものである。

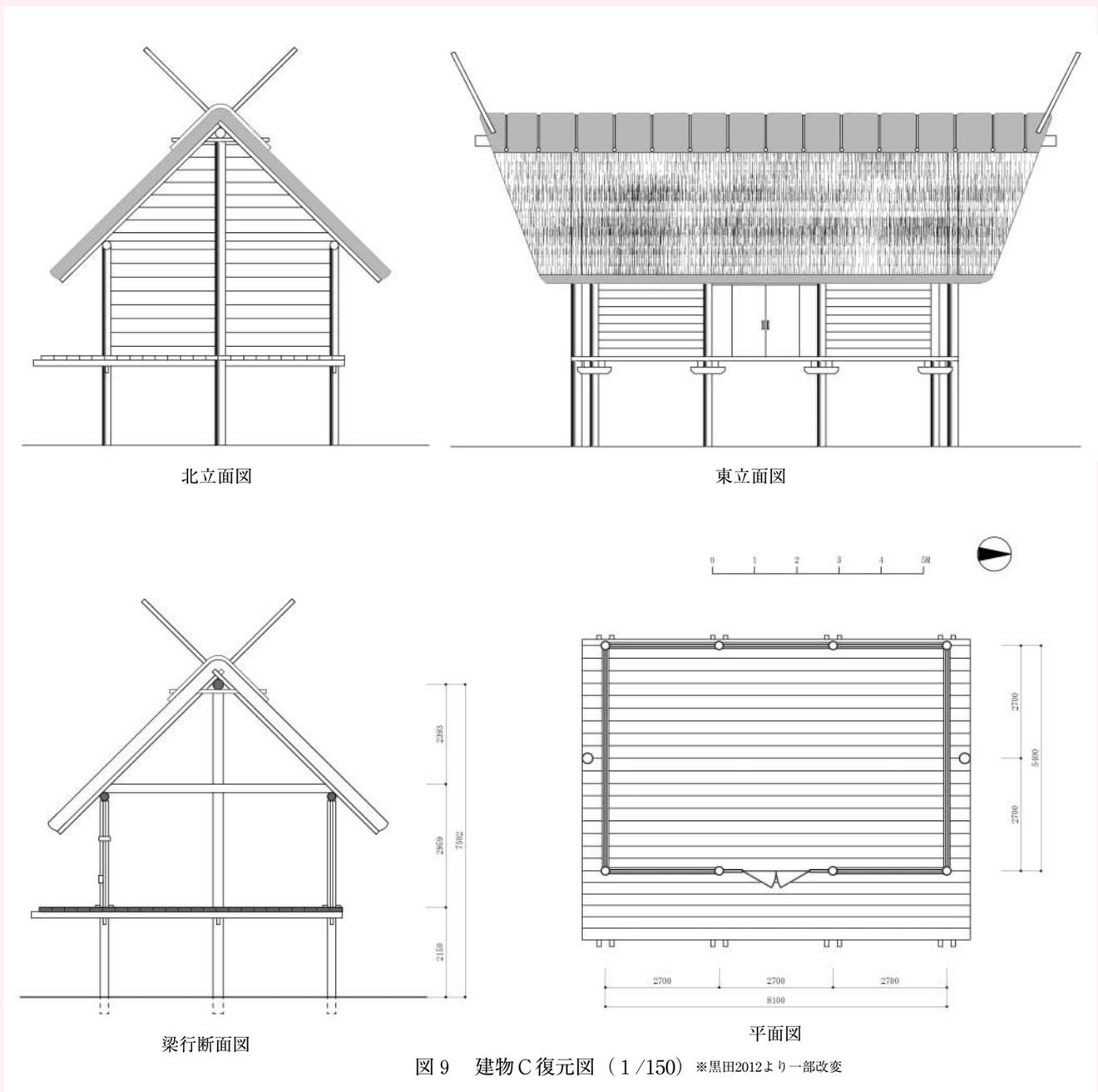




図10 建物C復元CG 1（北東より）
©NHK/タニスタ 監修 黒田龍二



図11 建物C復元CG 2（南東より）
©NHK/タニスタ 監修 黒田龍二

建物D

第166次調査区東半部において検出したもので、建物の西半は後述する布留2式期に埋没する幅約8mの区画溝（SX-1001）によって大きく削平を受けていた。調査によって確認されたのは南北4間（19.2m）×東西2間（6.2m）分で、方位は先の建物B・Cと同じくN-4～5°-W、真北に対してやや西へと振れを持つものであった。

残念ながら本来の建物規模は不明と言わざるを得ないが、建物Cとの位置関係からは東西規模が2～4間の中でおさまること、柱穴の形状がほとんどの柱穴が方形もしくは南北に長い形状を示しているのに対し、南辺・北辺の柱穴が東西に長い傾向がある中で北西隅の柱穴だけが南北に長いものであることから、この部分が建物の棟通りにあたる可能性を考え、4間四方の建物構造を推定した。（図12～15・写真9～13）

このことは黒田氏による建築学的な検討からも東西4間の可能性が最も合理的であるとの御教示を頂いており、推定で南北約19.2m×東西約12.4m、床面積約238.08㎡と当時としては国内最大規模の建物を復元するに至った。

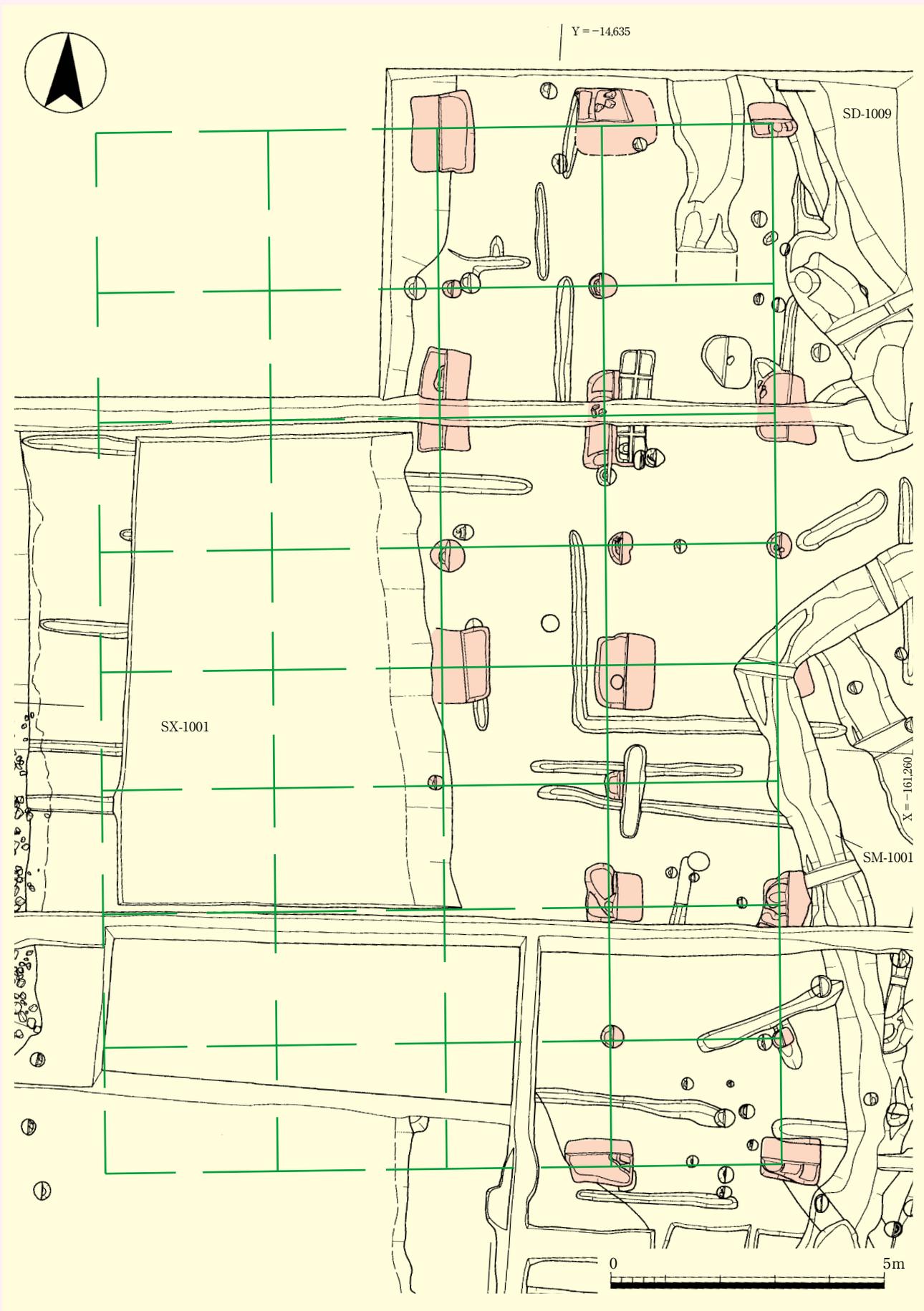


图12 建物D遺構平面図 (1/100)

なお、この復元案による建物Cとの距離は約6.4mとなる。検出された柱穴の平面プランは一辺約1mの方形のものから約1m×約1.7mのものなどばらつきが見られるが、先述したようにすべてが方形もしくは長方形を基調としたプランを持っている。柱穴の深さは15cm～30cm程度と非常に浅く、建物規模から勘案すると後世にかなりの削平を受けたものと考えられる。

また、柱穴埋土の観察では多くの柱穴において柱材の抜き取り痕跡が確認でき、特に南から2列目の2基の柱穴ではその痕跡が顕著であった。柱穴内に残る柱のあたり痕跡から柱材の太さは32cmほどのものと推定され、建物B・Cよりもひとまわり大きな柱材が使用されていた様子がうかがえる。主柱の柱間は南北間で約4.8m、東西間で約3.1mになると考えられるが、南北方向の主柱穴間のほぼ中央からは径約40cm、建てられていた柱の太さは15cm前後と推定される円形の柱穴が検出されており、その配列から柱間の広い南北方向の床を支えるための束柱であった可能性が高いと考えている。

さて、建物D周辺は一連の調査対象となった微高地上でも地形的に高い地点にあたり、建物Dの東辺中央部から南東隅部では黄褐色粘質土の地山が一部露呈していたが、他の部分はすべて整地土によって



写真9 建物D全景1 (第166次 上が北)

遺構面が造成されていた。建物Dの柱穴はこの整地土上面および地山面から検出されているが、第166次調査区の東半部は後世の削平によるものか遺構の下限を探る鍵層となる包含層Ⅲが存在しなかったため、遺構の切り込み面については確認することができなかった。

しかし、この建物Dを構成する柱穴の多くが他の遺構によって削平を受けており、これらの遺構の時期から建物の時期を推定することができる。建物Dの柱穴を切る遺構のうち、古墳時代に遡る時期の古いものには建物北東隅の柱穴を切る溝（SD-1009）と建物東辺中央の柱穴を切る溝（SM-1001）、建物西半を大きく切る溝（SX-1001）の三者があり、現在整理途中ではあるが遺物の年代観からSX-1001は布留2式期、SM-1001は布留1式期、そしてSD-1009は布留0式期には埋没することが判明しており、建物Dが少なくとも布留0式期を含めてそれ以前には存在していた建物であると言える。

建物B・Cとの時期的な比較では、建物B・Cは庄内3式期を含めてそれ以前、建物Dは布留0式期を含めてそれ以前と確認し得る。遺構の下限には若干の時期差が残るが、建物Dが少なくとも整地土よりも上位から建築された建物であること、いずれの建物も柱材が抜き取られていること、建物の軸線や



写真10 建物D全景2
(第166次 南より)

A～Dが建物の四隅を示す。なお、C・Dの黄色い柱は建物の全容をイメージするために柱推定位置に模擬柱を立てている。



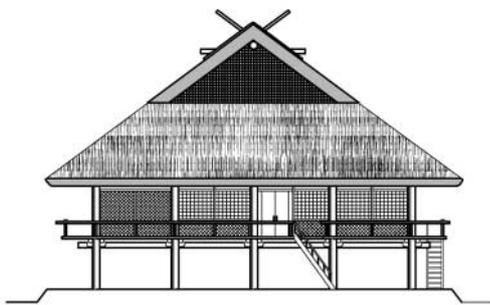
写真11 建物D全景3
(第166次 北東より)
黄色い柱は模擬柱である。



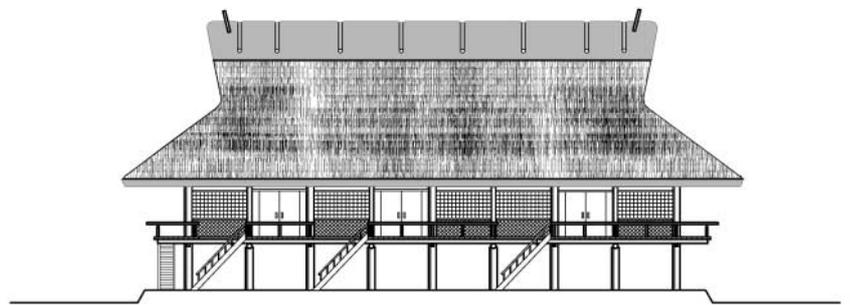
写真12 建物Dの柱穴1（第166次 南より）
南東隅柱穴で、向かって左の深い部分は下層遺構である。



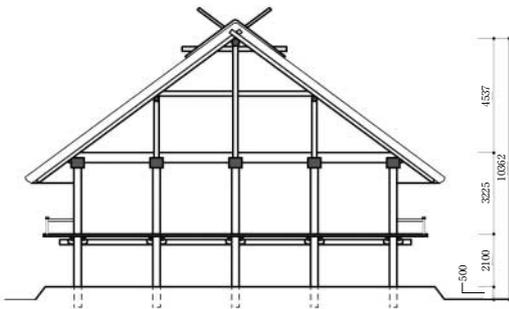
写真13 建物Dの柱穴2（第166次 南より）
南辺より北へ1列目西側検出。左奥に抜き取りの穴が見える。



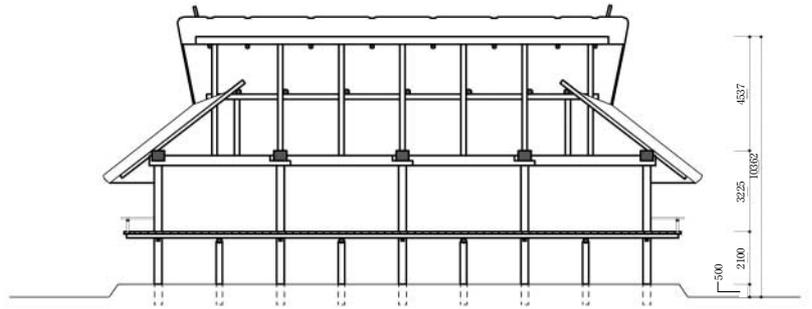
南立面図



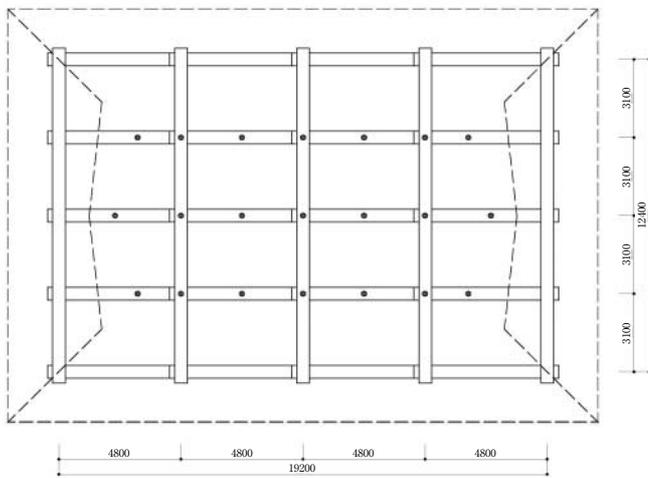
東立面図



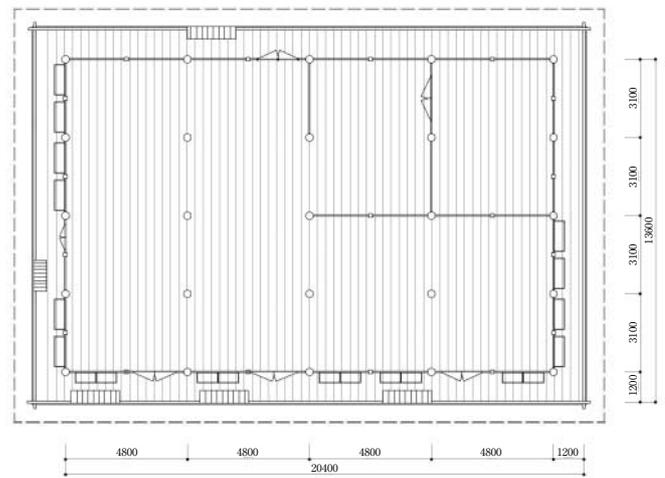
梁行断面図



桁行断面図



梁伏図



平面図

図13 建物D復元図（1/300）※黒田2012より一部改変

方位が建物B・Cと正しく揃えて建てられていることなどから、3棟の建物は併存して建っていたものと判断した。

このことは後述する建物Dの廃絶に伴うとみられる大型土坑（SK-3001）の祭祀の時期や建物群に伴うとみられる柱列が建物Dの南側までを画するものであることから、是認されるものである。

次に、図13～15は黒田氏による建物Dの復元案である。この復元案では建物の下に高さ50cm程度の基壇が復元されている。これは検出された建物D柱穴の深さが約15～30cm程度と非常に浅いものであったことを受けたもので、後世の削平がどの程度のものであったのかは不明ながら、調査区の現地表面から遺構面までが僅か60cmと非常に浅いことや、建物Dが検出されたものと同一の遺構面からは本来の深度がそれほど深いとは考え難い中世の素掘り小溝が検出されていることなどを勘案すると、建物Dの廃絶以降、中世までの間に微高地上一帯のレベルが下がるほどの大規模な遺構面の削平が行われない限り、当時の遺構面がメートル単位で大きく削平されているとは考え難いことから、建物Dの柱材は柱穴におさまる部分と基壇によって固められた部分の双方で建物の強度を保ったのではないかとの想定に基づくものである。



図14 建物D復元CG1
(東北より)
©NHK/タニスタ 監修 黒田龍二



図15 建物D復元CG2
(南東より)
©NHK/タニスタ 監修 黒田龍二

柱列

第162・168・170次調査区において検出された遺構である。この柱列はすでに第20次調査時にその存在が想定されていたもので、第162次調査では先に確認されている部分も含めて南北方向に約23m分が検出されている。この柱列は当初、微高地上を東西に区画するものかと考えられたが、途中で柱列が90°曲がり東へと延びることが判明しており、



写真14 柱列の検出状況（第168次 西より）
白い模擬柱が柱列、奥の黄色い模擬柱は建物D南面柱穴である。

建物B～Dの建物群全体を取り囲む柵や塀のような構造になると推定される。（図2・写真14～17）

柱列の構造で特徴的なのは建物群西側の平面プランで、建物B部分ではこれに柱列が沿うように西へと突出していた。建物群の南側では柱列は直線的に検出されている。この柱列は途中南北溝（SX-1001）や溝（SD-1011）などの後世の遺構に大きく削平を受けているためこの間の状況は確認できなかったものの、距離にして34m分を検出している。

これらの柱穴は多くが径30cm前後、深さ40cm程度の規模を持つもので、柱列のラインに乗るものすべてが柱列を構成するの否かは判然としないが、南面柱列では柱間が1.7m前後、西面では1.5mと2m前後の間隔の二者を想定しているが、詳細な検討は正式報告において行うこととしたい。

なお、この柱列を構成する柱材の太さは約15cmで、柱穴の幾つかからは建物群と同様に廃絶時には柱材が抜き取られた痕跡が確認できており、建物Bより北側の柱列の中には抜き取り穴内に頸部から下を打ち欠いた加飾二重口縁壺を埋納した柱穴や、低脚付の小形丸底鉢と土製支脚などが埋納された柱穴などが確認されており、柱列が整地土上面から切り込まれていることと合わせて柱列の廃絶時期を探る手掛かりとなる。

これら抜き取り穴内からの出土土器は二重口縁壺や低脚付小形丸底鉢などと、特殊な器種であり、詳



写真15 柱穴に残る柱痕跡（第162次 南より）
手前に柱痕跡が確認できる。



写真16 抜き取り穴内の二重口縁壺
（第162次 南より）

細な時期を限定するのは困難なものばかりだが、形式的には庄内式期でも比較的新相に属するものとみられ、柱列の廃絶もこの頃のものと考えられる。

このことは建物Bの北側において柱列の一部が庄内3式期埋没の溝（SD-2001）に削平を受けていることや、建物群南面では後述する庄内3式期新相のものともみられる大型土坑（SK-3001）や布留1式期の溝（SD-1011）によって削平を受けていることとも矛盾しない。



写真17 抜き取り穴内の小形丸底鉢
（第162次 東南より）

建物B～Dおよび柱列の時期

各遺構の所属時期については遺物の整理途中にあり、現時点では建築時期等について厳密な時期を導き出すのは困難である。しかしながら、これまでに得られた知見では整地土の造成および建物B～D、柱列の建築時期は庄内式期に遡ることは確実であるが、整地土層内出土土器や整地土層下の遺構の年代観からは庄内式期の最古相には遡らないことが判明している。

一方、これらの遺構の廃絶は個々の建物の柱材の抜き取り穴内から出土した土器の年代観や、建物B・Cおよび柱列の柱穴を切る第162次調査検出の溝（SD-2001）や建物Dの柱穴を切る第166次調査検出の溝（SM-1001）・溝（SD-1009）、柱列の柱穴を切る第168次調査検出の大型土坑（SK-3001）などとの切り合い関係から庄内3式期を含めてそれ以前と考えている。この事は、下層遺構面を覆う包含層Ⅲ上面、上層遺構の調査において布留0式期の土坑などが複数確認され、建物群の廃絶から包含層Ⅲの形成、そして上層遺構の形成までに一定の時間幅が想定されることからもうかがえるものである。

c. その他の遺構と遺物

井戸（SK-3001A・SK-3001B）

第176次調査第1区、建物Bの西約14mの地点で包含層Ⅲよりも下部、整地層上面において検出された井戸である。（図2・写真18～19）

この遺構の検出地点はかつて想定されていた建物Aという建物遺構の推定位置にあたるものだが調査の結果、当初想定していた建物遺構は存在しないことが判明している。しかしながら、この調査区からは他の建物群と時期を同じくするものを多く含むとみられる100基を超える柱穴の検出があり、今後の調査の進捗により想定とは違う形で建物遺構が展開する可能性が考えられるものである。



写真18 井戸の検出状況（第176次 上が北）



写真19 井戸の検出状況
(第176次 北より)

さて、井戸（SK-3001A）は裏込め部分を含めた直径が約2m、埋土上部は井戸枠の抜き取りに伴う攪乱を受けていたが、縦板を用いた井戸枠があったようで一部が残存していた。

残された井戸枠および抜き取り穴から推定される井戸枠の形は方形のもので、規模は最大で一辺約80cm、底面は湧水点に達しており、深さは90cmを測る。出土遺物にはミニチュア壺のほか土器片などがみられ、その年代観からは埋没および井戸枠の抜き取り時期は布留0式期であることが判明しているが、一部断ち割りをを行った裏込め土の調査では遺物量は少量ながらも確実に布留式期に降る土器の出土は無く、先の建物群と井戸が併存する可能性も考えられる。

また、この井戸の西側には幅1m程度の細い溝が接続し、溝の底には10cm前後の礫が多量に詰められていたが、纏向遺跡内においても珍しい縦板を用いた方形井戸枠の構造や石敷き溝を付設すること、建物群の柱材と同じく井戸枠材の抜き取りが行われていること、建物群と併存する可能性も考えられることなどを考え合わせると今後の調査の進捗により重要な意味を持つ遺構となる可能性がある。

なお、この調査区からは井戸（SK-3001A）に切られる形でもう1基井戸（SK-3001B）の存在が確認されているが、遺構の大半が先の井戸（SK-3001A）に削平を受けており、検出状況からは同じ場所に井戸を掘り直したかのような様子を呈している。この井戸は遺構の残存率が極めて悪かったため、出土遺物が少なく、構築および埋没時期などは確認することはできなかったが、井戸（SK-3001A）に切られていることから、これもまた建物群に併行する時期に遡る可能性が考えられる。

大型土坑（SK-3001）

第166・168次調査において検出された土坑である。第166次調査時には遺構北半が調査区南端にかかって検出されたものの、湧水により遺構埋土の崩落（泥化）が激しかったため調査を中止し、第168次調査において再調査を実施したものである。（図2・写真20～25）

遺構の平面プランは遺構検出時には写真20に示したように長方形の平面プランが確認されたものの、掘削後は南北約4.3m、東西約2.2mの長楕円形のプランのものとなっている。

この土坑は遺構上部の多くが布留1式期の溝遺構であるSD-1011によって削平を受けていることから、本来は若干規模の大きいものだったと考えられ、溝（SD-1011）の削平を受けていない部分では湧水点



写真20 土坑の検出状況
(第168次 西北より)



写真21 土坑下層上部からの
遺物出土状況
(第168次 東より)

にまで達する深さ約80cm分が残存していたが、大きく削平を受けた土坑西側では約35cm分しか残されていないなかった。

現時点で判明している土坑からの出土遺物は次頁の表に示したように土器や木製品、動植物遺存体など多種多量のものがあった。これらは遺構北側に集中して出土する傾向にあり、何らかの祭祀行為に伴うものと判断されるが、中でも多量に出土した桃核は前例の無いものである。桃核の中には未成熟の種子が一定量含まれており、成熟・未成熟を問わず桃が大量に集められたようで、一部には果肉が残っているものも含まれていた。

また、その他の遺物で特徴的であったのは木製品に使用に伴う傷みや摩滅が認められなかったこと、横槌2点とヘラ状木製品4点、底部穿孔を施した小型直口壺を除く総ての遺物が壊された状態かつ、それぞれが一部分しか出土しなかったことである。これらの遺物は土坑の近隣で祭祀を行った後に使用した道具類を破壊し投棄されたものと考え、それぞれが一部分しか出土しなかったことから他にも同様の土坑が存在し、道具類が分散して投棄されている可能性も考えられる。



写真22 下層上部カモ科胸骨出土状況（第168次）



写真23 下層下部遺物出土状況（第168次 北より）



写真24 出土した桃核（第168次）



写真25 土坑完掘状況（第168次 北より）

纏向遺跡第168次調査大型土坑（SK-3001）出土遺物一覧	
動物遺存体	イワシ類・タイ科（マダイ・ヘダイ）・アジ科・サバ科・淡水魚 ツチガエル・ニホンアカガエル・カモ科・齧歯類・ニホンジカ・イノシシ属
植物遺存体 （食用となる ものに限定）	野生種 カヤ1・ヤマモモ36・クリ2・シイ属5・コナラ属145・アカガシ亜属9・ムクノキ14・ ヒメコウゾ480・ヤマグワ23・サクラ属サクラ節3・キイチゴ属2・サンショウ80・ トチノキ216・ブドウ属22・マタタビ18・サルナシ15・グミ属4・ ガマズミ属1・ニワトコ7・アカザ属4・ヒユ属34・シソ属2・イヌホウズキ87
	栽培種 モモ2,769・スモモ52・イネ938・ヒエ2・アワ74・アサ535・ ササゲ属3・エゴマ24・ウリ類2,076・ヒョウタン類213
土器	線刻を施した短頸直口壺・底部穿孔を施した小型直口壺・ 手捏ね土器・ミニチュアS字甕・壺・高坏・甕・器台など
木製品	ヘラ状木製品4・黒漆塗り弓1・槽1・筒形容器1・ 横槌2・剣形木製品1・竹製籠6・敷居材1・垂木1
その他	ガラス製粟玉2

※動物植物遺存体は金原正明氏・宮路淳子氏の鑑定による。調査途中であり、種類はさらに増える可能性がある。

この他、自然科学分析の結果で特筆すべきものにサクラ属（モモ・スモモ型）の花粉の検出があり、土坑の近隣にモモ・スモモの林が広がっていた事が推定され、土坑から出土した桃はこの林において栽培されていた可能性が指摘されている。これら自然科学分析の結果からは、ともに出土した土器・木製品以外の土坑に投棄された供献遺物の具体的な組成が明らかとなり、土坑周辺において行われた祭祀の状況がより鮮明となった。中でも豊富な栽培植物の内容や内陸の纏向遺跡において同一の土坑から多様な海水魚が確認されたことは注目すべきもので、鳥や獣などともあわせてバリエーションに富んだ供物が供献されていた様子がうかがえる。

さて、出土遺物の年代観から土坑は庄内3式期新相頃のものだと判断されるが、祭祀の時期が建物群の廃絶の時期と近接すると考えられること、検出された3棟の建物のうち、中心的な建物とみられる建物Dに近接して掘削されていること、土坑の北端が建物群南辺を画する柱列のラインと重複することなどを勘案すると土坑は建物群の解体時に執り行われたマツリの痕跡と考えている。

このことは本土坑からの出土遺物に鋤・鍬の類の農具や土木用具が存在せず、容器類の他は剣形木製品や弓など武器形木製品が中心となること、火を用いた痕跡が認められないこと、多量の桃核や海産物などが供物の中に含まれることなど、これまでに確認されている纏向型祭祀土坑の様相とは使用される器物や供献遺物の内容や質に違いが認められることから想定できることである。

建物E

第170次調査において建物Dの東側から検出された建物遺構である。調査区の関係上、全体像は明らかにし得なかったがN-1~2°-Eとはほぼ方位に則った南北9m以上の規模を持つ大型建物になると考えており、大型の柱穴5基が検出されている。(図16・写真26~29)

柱穴にはやや隅丸の長方形と方形の2つのタイプがあるが、長方形柱穴は東西が約1.2m、南北が約70cm、深さ約35cmの規模を持つものである。柱穴内は東側が一段深く掘削されていることから柱通りは柱穴内の東側に想定され、最も南端で検出された長方形柱穴内の東側には柱を受けるための大きな根石が据えられていた。

一方、方形柱穴は一辺が約70cm、深さ約25cmとやや小さめのもので、長方形柱穴間の中央に長方形柱穴と東辺を揃えて配置されていたが、長方形柱穴と同様に柱材の抜き取りが行われているようである。

これら建物Eの柱穴配置の構造は先に報告した建物Dの建築原理と共通するもので、長方形柱穴は主柱を建てるためのもの、方形柱穴は床を支える束柱のための柱穴と考えている。このことは主柱穴間の距離が約4.5mと非常に広く、間で床を支える必要があると考えられること、そして方形柱穴がその中間に正しく配置されていることからもうかがえるものである。

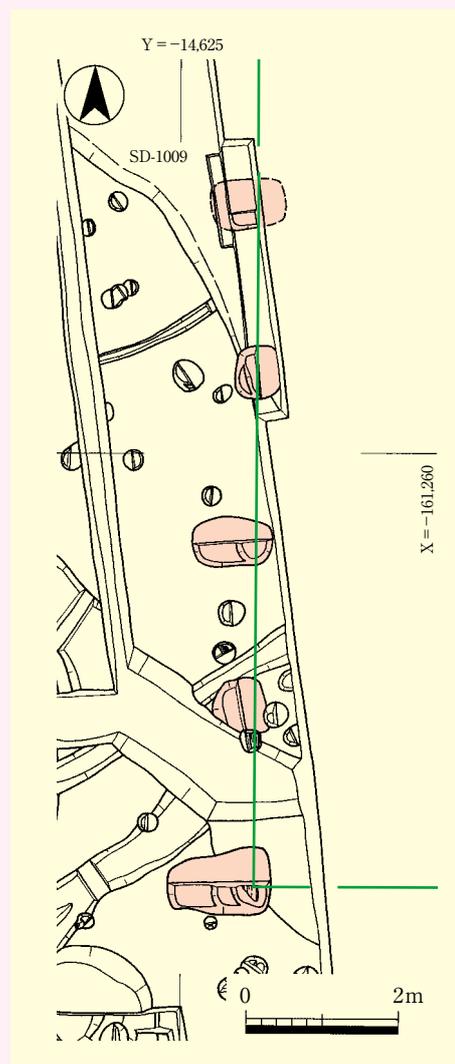


図16 建物E遺構平面図(1/100)



写真26 建物E全景
(第170次 西北より)



写真27 建物E南端主柱柱穴 (第170次 南より)



写真28 建物E北東柱柱穴 (第170次 西より)

調査面積の限界もあり、残念ながら建物Eの建築・廃絶の時期は確認できなかったが、建物北側の2基の柱穴は幅約4mの溝(SD-1009)の埋没後に掘削されていることから、少なくとも溝の埋没時期である布留0式期を含めてそれ以降に建てられたものであるということが判明している。この建物Eはこれまでに確認されている3棟の建物群とは明らかに建築時期や建物方位が異なる事から、3世紀前半の建物群と同じ場所に未知の建物群が存在する可能性が考えられることとなり、今後の調査の進捗によりその全貌が明らかになることが期待される。

なお、写真29は建物Eの東柱南端柱穴の下層から出土した木葉の塊で、柱穴埋土の下層下面中央に敷き詰められていたものである。この柱穴の一部は先行する弥生時代後期の溝上に位置することから、脆弱な地盤に対して、柱材の沈下を防ぐために敷き詰められたものとみられる。本来はこの葉の上に礎板のようなものが据えられていた可能性もあり、柱材の抜き取りに際して礎板も撤去されたのではないかと考えている。茶色く変色した葉の中には当時の色彩である緑色の部分も残されており、今後の年代測定で建物のおよその年代が、樹種同定からは建築の季節が推定できる可能性があり、重要な資料である。



写真29 東柱南端柱穴出土の葉 (第170次)

区画溝 (SX-1001)

第166・168・173・176次調査地にまたがって検出された溝遺構で、人工的に掘削されたものと考えている。溝は東辺にあたる第166・168・173次調査地を縦断する南北溝部分と、南辺にあたる第173次調査地から第176次調査地第5区から第3区へと横断する東西溝部分、そして西辺にあたる第176次調査地第3区において北へと折れ曲がり、調査区外へと続く南北溝部分からなっている。(図2・写真30～32)

東辺の溝は幅約8m、深さ約1m、長さ54m以上の規模を持つ。溝の北側はさらに調査区外へと延びており、その全長は不明だが、南端は谷地形の直前で止められ谷部分へは抜けられないことが確認されている。この溝の埋土は粘土層からなり、滞水状況を示すことから北側部分も谷へは抜けず閉鎖的な状況にあることが推定される。

南・西辺の溝は南辺溝東端で確認された盛土からなる渡り土堤を介して東辺溝と一体をなすもので、南辺溝の長さは約57m、幅約6mであったが上部が後世の遺構により大きく削平を受けたと考えられ、本来は東辺に近い規模のものであった可能性がある。

これらの溝遺構は、その平面プランから微高地を取り巻く大規模な区画溝となることが想定されるが、区画内からは同時期の遺構が確認されておらず、遺構の性格を特定するには至っていない。現時点では居館に伴う区画溝となる可能性が高いと考えており、これに伴う区画内の遺構は既に削平を受けてしまったものと思われる。

なお、この遺構は原則として保護を優先し内部調査は部分的なものにとどめたが、一部断ち割りを行った第166次調査時には多くの土器のほか、板材・柱材・梯子など多量の加工木が出土しており、遺構が布留2式期には埋没したものであることが判明している。



写真30 区画溝東辺の様子(第168次 北より)



写真31 区画溝断ち割り状況(第166次 西南より)



写真32 区画溝西南コーナー部(第176次 西より)

石貼り溝 (SX-1002N・SX-1002S)

第166・168次調査において検出した遺構で(図2・写真33~35)、SX-1002Nは幅約5m、深さ約50cm、遺構の検出長は約16mの石貼り溝である。この溝は東肩部分が先述した区画溝(SX-1001)と重複するもので、土層の観察からは石貼り溝の掘削に先立ち、この時点まで存在した区画溝埋没後の窪み部分を埋め、整地を行った後に石貼り溝が掘削されたことが確認できた。

石材を葺くにあたっては厚さ20cm程度とあまり厚くない裏込めが行われ、拳大前後の大きさを中心とした石材が葺かれていたが、転落石もあまり多く無く、写真でも確認できるようにその配置はまばらなものであった。

さて、溝の平面プランは北から約12mの地点で溝の東肩が西へと曲がっており、一見溝が収束するかに見えるが、西肩はさらに南へと直線的に伸びており、この部分以南は約2.8mと幅が狭く、石材が配されない部分が約4mにわたって続き溝が収束するという特異な構造を持っている。

SX-1002Nの南端から約7mの地点で検出した素掘りの溝であるSX-1002Sは幅約2m、深さ40cmの規模を持つもので、SX-1002Nの狭く石材が配されない部分の溝と対になるものと想定しており、両者の形態から遺構の性格については居館に伴う区画溝になるものと考えているが、周辺の調査からは同時期の遺構は全く確認されていない。これについては先の区画溝(SX-1001)のケースと同様に後世の削平により、掘削深度の深かった石貼り溝だけがかろうじて残り、他の遺構は消滅した可能性を考えている。



写真33 石貼り溝全景
(第166・168次調査の合成写真。上が北)



写真34 石貼り溝 (SX-1002N南端) 調査風景
(第168次 北より)



写真35 石貼り溝 (SX-1002N) 石材検出状況
(第166次 東より)

なお、SX-1002Sについては、SX-1002Sの南約17mの地点に設定された第173次調査西拡張区では溝の延長部分が確認できず、南へ直線的に伸びるものでは無いことが判明している。また、SX-1002Sより南東に位置する第173次調査区内からも溝の延長部分は確認されておらず、途中で曲がって東へと展開するものではないことも確認されていることから、SX-1002Sは第168次調査区と第173次調査西拡張区との間で西側へと曲がり展開する可能性を考えている。

さて、本遺構からの出土遺物の量は多くないものの、木製弓のほか土師器高坏や須恵器の坏身・坏蓋などの破片が出土しており、TK-47 型式期頃には埋没するものであることが判明している。また、本遺構に確実に伴うとは言えないが、第166次調査区南壁際の側溝掘削時にはSX-1002Nの上部埋土と思われる地点より滑石製子持ち勾玉の小片が出土しており、居館遺構との関連で注目されるものである。

銅鐸片

遺構に伴うものではないが、特筆すべき遺物として第168次調査区西南部の古墳時代後期の包含層から銅鐸の鱗の破片が1点出土している。破片は長さ約3.7cm、幅約3.2cm、重量13.14gの小さなものであるが、鱗の大きさから推定すると本来は比較的大型の突線鈕式銅鐸の破片と考えられるものである。調査区周辺では西方約100mの地点において昭和47年に実施された第7次調査区からもほぼ同様の大きさに復元される突線鈕式銅鐸の飾耳片が出土しており、今回の銅鐸片との関係が注目されるものである。



写真36 銅鐸片の出土状況（第168次 東より）



写真37 出土した銅鐸片（第168次）

4. まとめ

トリイノ前地区における範囲確認調査は現在も継続中であるが、これまでの調査からは対象地となった微高地上には多くの特殊な遺構が展開することが明らかとなった。

特に庄内式期に遡る大型建物Dを含めた3棟の建物群は庄内式期における纏向遺跡の居館域と呼ぶに相応しい規模と構造を持つもので、ここではこれまでに確認・想定されている一連の調査成果を整理しておくこととしたい。

- ①依然として居館域の正面方向は不明ながら、建物B～D、3棟の建物配置から推定される軸線は東西方向に通るもので、建物・柱列などのすべての構造物が方位を揃えて建てられていたこと、建築から廃絶までのプロセスが期を同じくすることなどから、これらの建物群が強い計画性に基づいて同時に建築されたと判断される。
- ②地形からの推定に頼らざるを得ないが、周辺には東西150m×南北100m前後の範囲に居館域が展開する可能性を考えており、その内部は柱列を境として内郭と外郭に区画されていたと思われる。
- ③建物Dの復元規模は庄内式併行期までの建物遺構としては国内最大の規模を誇るものとなった。現時

点では建物の性格については判然としないが、その規模からは居館域における中心的な役割を果たすものと考えている。

- ④大型土坑（SK-3001）は、これまでに判明している纏向型祭祀土坑とは構造や遺物の組成に違いが認められるもので、特別な意味合いを持った祭祀が行われたものと考えられる。祭祀の目的となったものが何かは明らかにし得なかったが、出土遺物の年代観や土坑が柱列のラインと重複することなどを積極的に評価するならば、建物群の解体時に執り行われたマツリの可能性も考えられる。
- ⑤纏向遺跡において2例目となった銅鐸片の出土は近年確認されている大福遺跡や脇本遺跡の破碎された銅鐸片との関連が注目されるもので、銅鐸を保有しない時期の遺跡と考えられる纏向遺跡において破碎された銅鐸片が出土したことは弥生時代から古墳時代への転換期における社会や祭祀の変化を考える上で極めて重要な資料といえる。
- ⑥調査の対象となった微高地上には庄内式期の居館遺構以外にも、布留2式期の区画溝（SX-1001）やTK-47型式期の石貼り溝（SX-1002N・1002S）、時期は不詳ながら建物Eなどの新しい時期の居館遺構も複数の時期にまたがって存在することが判明しており、微高地上が居館の造営に適した場所であったことがうかがえる。

これらの調査成果を総合すると、一連の調査対象となった微高地上は庄内式期に纏向遺跡の中心的な人物がいた居館域であった可能性が極めて高いと考える。このように整然とした規格に基づいて建築された建物群の確認は国内でも最古の事例となるもので、これまでに判明している弥生時代集落の大型建物や中心区画内の内容とは一線を画するものと言えよう。このように考えると、過去6次にわたる範囲確認調査で明らかとなった纏向遺跡の居館遺構は、弥生時代から古墳時代への変革期における列島規模での権力中枢の様子をうかがうことができるもので、その全体像の解明は我が国における王権の形成過程を探る上で極めて重要な意義を持つものとする。



写真38 建物群配置状況（第162・166・168・170次調査の合成写真。上が北）

Ⅲ おわりに

纏向遺跡は庄内0式～布留1式期（3世紀初頭から4世紀初め）にかけての集落遺跡で、近年実施されている居館域の調査や研究の進展に伴い注目を浴びることとなっている。「纏向遺跡」の命名は昭和46～47年にかけて行われた雇用促進住宅や纏向小学校・県営団地建築に先立つ発掘調査によって、巻野内・草川・辻・太田・東田・大豆越などの旧纏向村の多くの大字に跨って遺構が展開することが判明したことから名付けられたものである。

発掘調査は現在176次まで実施しているが、調査面積は南北約1.5km、東西約2kmにもおよぶ広大な面積の2%に満たないもので全体像の解明にはほど遠い状況だが、これまでの調査からは多くの重要な遺構や遺物の発見が相次いでいる。ここではこれまでに実施された調査の内容や遺構・遺物の状況から考えられている纏向遺跡の持つ特質とその重要性について整理し、まとめとしたい。

1. 纏向遺跡の諸属性

遺跡の調査は桜井市教育委員会と奈良県立橿原考古学研究所により継続的に行われており、多くの知見が得られている。遺跡が全国的に注目されるようになった1980年代までに考えられていた纏向遺跡の持つ特質を要約・列挙すると、

- ①集落規模が極めて大きく、前段階の弥生時代の拠点的な集落の規模をはるかに上回るばかりでなく、同時期の集落でも同等の規模を持つものは皆無であること。
- ②弥生時代には過疎地域であった纏向地域に3世紀初めに突如として大集落が形成されること。また、遺跡の出現・繁栄や消長が周辺の前期古墳の動向と時期が一致していること。
- ③本来近畿の墓の系譜には無い墓制である前方後円墳、纏向型前方後円墳と呼ばれる纏向石塚古墳・矢塚古墳・勝山古墳・東田大塚古墳・ホケノ山古墳などの共通の企画性を持った発生期の前方後円墳群が存在し、後の古墳祭祀に続く主要な要素を既に完成させていたこと。
- ④農具である鍬の出土量が極めて少なく、土木工事用の鋤などが多く出土しており、農業を営む一般の集落とはかけ離れた様相を呈していること。遺跡内の調査では未だ水田・畑跡が確認されていないことなどを考え合わせると農業を殆ど営んでいない可能性が高いこと。
- ⑤吉備地域をルーツとする弧帯文様を持つ特殊器台・弧文円板・弧文板・弧文石などの出土から吉備地域との直接的な関係が想定されること。弧帯文様を持つものは吉備地方を中心に葬送儀礼に伴って発展したものであり、纏向遺跡ではこれらの祭式が直接古墳や集落での祭祀に取り入れられた可能性が高いこと。
- ⑥他地域から運び込まれた土器が全体の15～30%前後を占め、量的に極めて多いこと。そして、その範囲が九州から関東にいたる広範囲な地域からであること。
- ⑦奈良盆地東南部という各地域への交通の要所に位置し、搬入土器の存在と合わせて付近に市場の機能を持った「大市」の存在が推定されること。
- ⑧庄内式期の建物の中にはほぼ方位に則って建築され、周囲に柵をめぐらした極めて特殊な掘立柱建物が存在すること。

などが挙げられており、既に1980年代には纏向遺跡は「新たに編成された政権の政治的意図によって建設された日本最初の都市」、「初期ヤマト政権最初の都宮」との位置づけがなされている。

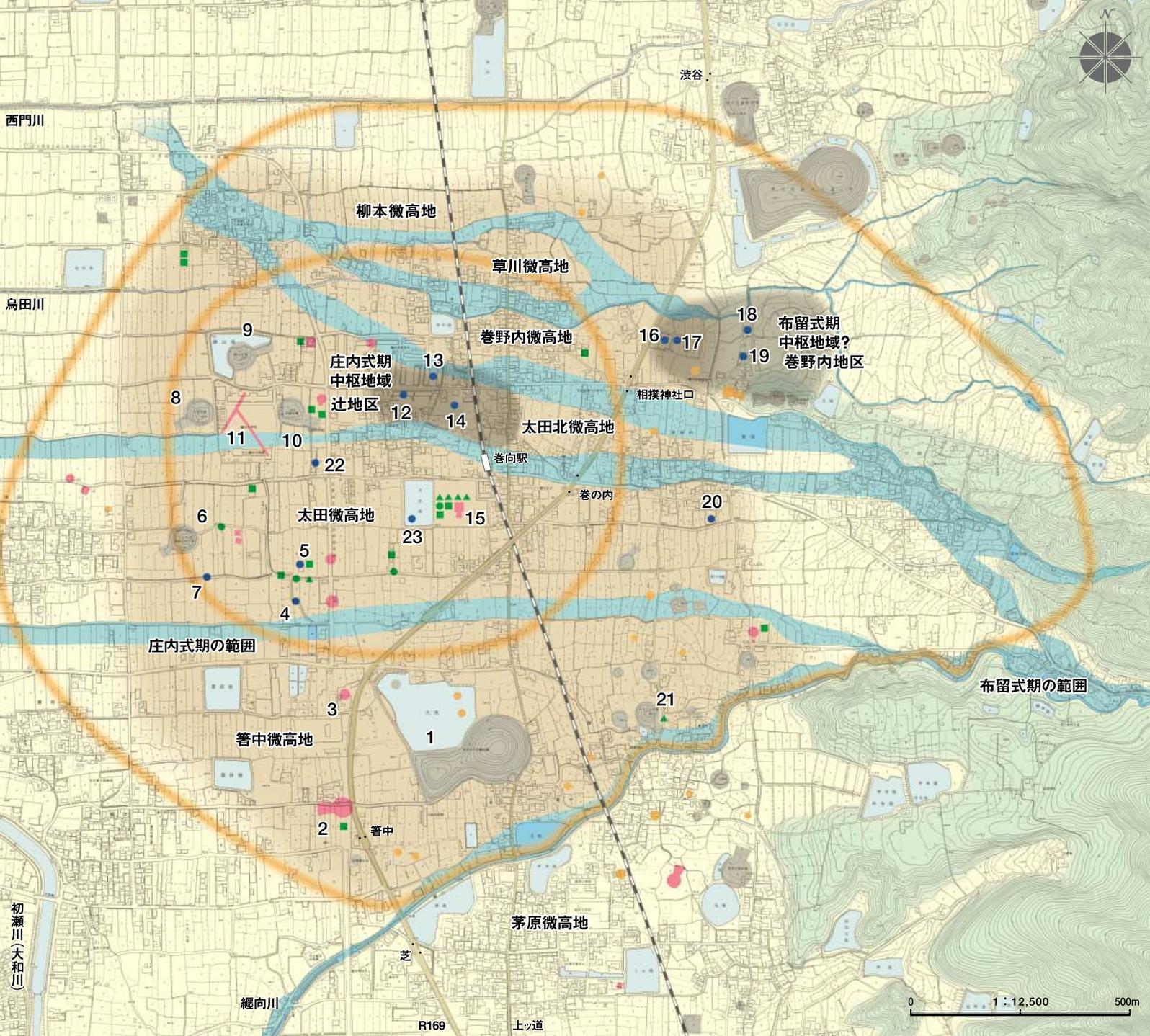


図17 纏向遺跡の旧地形と墳墓・遺構の分布 (旧流路や微高地の範囲は未確認の部分も多く厳密なものではない。)

■ 現在も地表で確認できる古墳	■ 発掘によって確認された遺構と埋没古墳	■ 現在その存在が確認できない古墳 (消滅した物も含む)
■ 方形周溝墓が確認された地点	▲ 木棺墓が確認された地点	● 土器棺墓が確認された地点
		● 主な遺構・遺物の出土地点

1. 箸墓古墳 2. 箸中イヅカ古墳 3. 箸中ビハクビ古墳 4. 南飛塚古墳 5. 北飛塚地区の住居跡 6. 東田大塚古墳 7. 東田地区の弧文石 (市指定文化財)
8. 矢塚古墳 9. 勝山古墳 10. 纏向石塚古墳 (国指定史跡) 11. 纏向大溝 12. 辻地区の祭祀土坑群 13. 辻河道出土の銅鐸と特殊埴輪 14. 辻地区の特殊建物
15. メクリ1号墳 16. 家ツラ地区の導水施設 17. 家ツラ地区の弧文板 (市指定文化財) と韓式系土器 18. 尾崎花地区の区画溝と鍛冶関連遺物
19. 尾崎花地区の巾着状布製品 20. 坂田地区の埴輪群と韓式系土器 21. ホケノ山古墳 (国指定史跡) 22. 李田地区のベニバナ花粉 23. メクリ地区の木製仮面

その後、2000年代に入ると纏向遺跡の調査は古墳や集落域の範囲確認調査が計画的に進められるようになるとともに、これまでに出土した遺構・遺物の整理・研究も飛躍的に進み、先に挙げられた以外にも多くの特質が認識されることとなった。その幾つかを列挙すると、

- ①太田メクリ地区の調査によって居住域の中から方形周溝墓・木棺墓・土器棺墓などとともに庄内式期的前方後方墳である全長28mのメクリ1号墳の存在が確認されたことにより、遺跡内での首長層の墓制や立地に明確な階層性の存在が見て取れること。

- ②遺跡の盛期には竪穴式住居が築かれず、高床式や平地式の建物で居住域が構成されていた可能性があること。
- ③韓式系土器の出土やベニバナ花粉・木製鎌・木製輪鍔、ホケノ山古墳の副葬品にみる舶載された鏡鑑類や鐮形鉄製品など、朝鮮半島や大陸系の遺物の出土量が増加し、これらの地域との交流が想定されること。
- ④複数の地点における鍛冶工房の確認や木製品加工所などの存在が確認されたほか、ベニバナを用いた染織が行われていた可能性が指摘されており、纏向遺跡の首長層が高度な技術者集団を抱えていたと考えられること。
- ⑤居館域の調査において方位に則り、明確な設計と強い規格性に基づいた建物群が確認されたこと。などを新たに加えることができると考える。

2. 纏向遺跡の位置づけ

今回報告を行った居館域の構造にとどまらず、これらの多様な特質からは纏向遺跡が他の集落遺跡とは一線を画する他に例を見ない遺跡であったことは明らかである。今、確実に言えるのは纏向遺跡が古墳時代の幕開けを告げる遺跡であるとともに、ヤマト王権成立の地として我が国の古代国家形成の過程を探る上で極めて重要な位置を占めるということであろう。今後更に様々な視点からの議論が深化することを期待するとともに、積極的に実態解明のための調査と恒久的な保存の措置を講じていきたい。



図18 纏向遺跡の想像復元図

©寺澤薫・加藤愛一

【図の出典および参考文献】

- 石野博信・関川高功『纏向』桜井市教育委員会 1976
- 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981 本書における須恵器の編年観はすべてこれに準ずる。
- 寺澤 薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第四十九冊 奈良県立橿原考古学研究所 1986 本書における土器の編年観はすべてこれに準ずる。
- 寺澤 薫「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』6 奈良県立橿原考古学研究所 1986
- 寺澤 薫『王権と都市の形成史論』吉川弘文館 2011
- 黒田龍二『纏向から伊勢・出雲へ』学生社 2012
- 橋本輝彦『ヤマト王権はいかにして始まったか～王権成立の地 纏向～』（財）桜井市文化財協会 2007

報告書抄録

ふりがな	まきむくいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	奈良県桜井市 纏向遺跡発掘調査概要報告書
副書名	トリイノ前地区における発掘調査
シリーズ名	桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第40集
編著者名	橋本輝彦
編集機関	桜井市纏向学研究センター
所在地	〒633 - 0085 奈良県桜井市大字東田339番地 TEL/FAX 0744 - 45 - 0590
発行機関	桜井市教育委員会
発行年月日	平成25（2013）年5月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村名	遺跡番号					
纏向遺跡 トリイノ前地区	桜井市 大字辻	292061	11-D-487	34° 32' 47"	135° 50' 24"	20090203 } 20130306	2,145㎡	範囲確認調査

所収遺跡	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
纏向遺跡トリイノ前地区	集落遺跡	掘立柱建物 柱列 土坑 溝 井戸 区画溝	土器 銅鏃 木製品 銅鐸片 動植物遺存体	庄内式期の居館域の調査

桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 第40集

奈良県桜井市

纏向遺跡発掘調査概要報告書

－トリイノ前地区における発掘調査－

編集 桜井市纏向学研究センター
〒633-0085 奈良県桜井市大字東田339番地
TEL/FAX 0744-45-0590

発行 桜井市教育委員会

発行年月日 平成25年5月31日

印刷 株式会社 明新社
〒630-8141 奈良市南京終町3-464



©NHK/タニスタ 監修 黒田龍二

Research Center for Makimukugaku, Sakurai City
Sakurai City Board Of Education